

[調査報告]パピルス66番  
ヨハネ福音書の写本

伊藤明生

キリストと世界 28 号抜刷 2018.3.1

# [調査報告] パピルス 66 番<sup>1</sup>

## ヨハネ福音書の写本

伊藤明生

(東京基督教大学大学院教授)

### 概要

パピルス 66 番は、元来ヨハネの福音書の本文全体を収録した写本であった。78 葉 (folio) で 156 頁におよぶ、パピルス素材のコデックスで、通常は紀元 200 年頃に作成されたと年代設定されている<sup>2</sup>が、異論はある。本稿では作成年代を巡る議論の詳細を取り扱うことは差し控えたい。古代の写本の作成年代は、写本の字体を根拠にして定められるので、多くの場合に議論の余地は大いにある<sup>3</sup>。ヨハネ福音

- 
- 1 本報告を書き上げるに際して参考にした一次資料は、Karl Jaros et al. eds., *Das Neue Testament nach dem Ältesten Griechischen Handschriften* (Ruhpolding: Verlag Franz Philipp Rutzen: Ruhpolding und Mainz / Wien und Würzburg: Echter Verlag, 2006); Jean Zumstein, *Évangile Selon Jean* (Paris: Presses Universitaires de France, 2008)。Editio princeps である Victor Martin, *Papyrus Bodmer II: Évangile de Jean chap. 1-14* (Cologny-Geneve: Bibliotheque Bodmer, 1956); Victor Martin, *Papyrus Bodmer II: Supplément Évangile de Jean chap. 14-21* (Cologny-Geneve: Bibliotheque Bodmer, 1958) も参照した。ボドメール・パピルスが蛭沼寿雄著『新約本文のパピルス』で一切取り扱われていないことは、残念なことである。
  - 2 Martin, *Papyrus Bodmer II: Évangile de Jean chap. 1-14*, 17; James R. Royse, *Scribal Habits in Early Greek New Testament Papyri* (Leiden: Brill, 2008), 399. その他では Philip W. Comfort and David P. Barrett は 2 世紀半ば (*The Text of the Earliest New Testament Greek Manuscripts* [A Corrected and Enlarged ed.; Wheaton, Tyndale House Press, 2001], 379)、Eric G. Turner は 200 年から 250 年 (*The Typology of the Early Codex* [University of Pennsylvania Press, 1977]), 66; P. J. Parsons (ed.) *Greek Manuscripts of the Ancient World* (2nd enlarged ed.; Bulletin Supplement 46; Institute of Classical Studies: London, 1987), 108.
  - 3 詳細は、Brent Nongbri, "The Limits of Palaeographic Dating of Literary Papyri: Some Observations on the Date and Provenance of P. Bodmer II (P66)" *Museum Helveticum* 71 (2014) 1-35; Don Barker, "The Dating of New Testament Papyri" *New Testament*

書1章1節から14章26節まで(1頁から108頁まで)は、6章11節から35節までを収録したと思われる2葉(35頁から38頁)を除いては、良好な保存状態である。保存状態は良好とはいえないが、109頁から152頁(ヨハネ福音書14章29節から21章9節まで)も現存する<sup>4</sup>。当初は箇所を特定できない断片が39もあったが、そのうち13は、その後、箇所を特定することができた。ヨハネ福音書19章のうち2葉がケルン・パピルス(所蔵目録番号4274/4298)として所蔵され<sup>5</sup>、1葉がダブリンのチェスター・ビーティー図書館に所蔵されている(チェスター・ビーティー聖書パピルス19番)<sup>6</sup>が、パピルス66番の残り大部分はジュネーヴ郊外のコロニー(Coligny)にあるボドメール図書館に所蔵され、ボドメール・パピルス2番として登録されている。ボドメール図書館は、愛書家として世界的に有名であったマルタン・ボドメールが長年収集した蔵書を取めるためにボドメール財団が故ボドメールの私邸を改築して創設された。

ボドメール聖書パピルスは、ナグ・ハマディ文書が発見された七年後に近隣のディシュナ平原で発見された。ディシュナは、ナイル川の右岸で、パノポリスとテーバイ(今のルクソール)との中間に位置する。ナグ・ハマディ文書は、1945年にナグ・ハマディ近くのチェノボスキオンの真北のジャバル・アル・タリフで見出された。文書の発見が最初に報告された町であるナグ・ハマディが文書の名称となった。ボドメール・パピルスは、1952年にディシュナ平原の真北で、ジャバル・アル・タリフの東12キロメートルに位置するジャバル・アブ・マナで発見された。これらの文書は、パコミウス修道院の図書館の蔵書の一部であったと想定されている。ジャバル・アブ・マナから数キロメートルの範囲内にあるフォー・オイブリには、パコミウス修道院のバシリカ様式の建物の遺跡が残っている<sup>7</sup>。ただし修道院の創設は

---

*Studies* 57 (2011), 571-82 を参照のこと。

4 153頁と154頁は、頁番号の部分だけ見つかっている。

5 Michael Gronewald, "Johannesevangelium Kap. 19,11-18; 13-15; 18-20; 23-24" in *Köln Papyri* (P. Köln) 5, ed. Michael Gronewald, Klaus Maresch, and Wolfgang Schäfer (Abhandlungen der Rheinisch-Westfälischen Akademie der Wissenschaften, Papyrologica Coloniensia, Sonderreihe 7; Opladen: Westdeutscher Verlag, 1985), 73-76. (上記に掲載の写真はプレート7)

6 139頁から140頁の一部で、ヨハネ福音書19章25節から28節、31節から32節。

7 詳細は、James M. Robinson, *The Story of Bodmer Papyri: From the First Monastery's Library to Upper Egypt to Geneva and Dublin* (Cascade Books, Eugene: 2011) を参照のこと。

紀元 4 世紀以前に遡ることはないので、別の場所で作成されたコデックスがパコミウス修道院に持ち込まれたことになる。それより前の詳細は不明のままである。

## コデックスの詳細

パピルス 66 番のコデックスの一頁分のパピルスの大きさは、縦 162mm×横 142mmで、欄外余白は内側が 12mmで外側が 25mmであるとヴィクトール・マルタンは報告している<sup>8</sup>。頁に収められた行数と一行当たりの文字数を一部抽出してみたものは、以下のとおりである。

頁	行数	行毎の平均文字数
1 頁	25 行 <sup>9</sup>	28.2 文字 <sup>10</sup>
2 頁	23 行	26.9 文字
10 頁	19 行	23.52 文字
20 頁	22 行	24.5 文字
25 頁	20 行	25.05 文字
26 頁	19 行	21.47 文字
39 頁	23 行	23.91 文字
40 頁	21 行	25.61 文字
50 頁	19 行	26.05 文字
60 頁	21 行	24.619 文字
80 頁	17 行	24.29 文字
95 頁	15 行	23.6 文字
105 頁	16 行	23.5 文字

因みに、行数を数えることができる頁の行数の平均値は、18.1 行であった。上記した抽出した結果から、写本の紙面に余裕を感じながら写字生は書写して行ったよ

8 Martin, *Papyrus Bodmer II: Évangile de Jean chap. 1-14*, 10. 原物を見て確認することはできていない。

9 Eric Turner は 26 行とするが、書名を記入した行を数えているのかもしれない (*The Typology of the Early Codex*, 86)。

10 尚、7 行目は右側に大部の余白を残してあるので、平均値算出に際して計算に入れてない。

うに見受けられる。徐々に文字を大きくして行って、頁毎の行数も行毎の文字数も徐々に減らして行くような一貫性は必ずしも認められないが、大雑把な傾向としては認めることができる。ただパピルス 66 番の写生字は、几帳面と同じ頁では文字の大きさが大きく変わることはない。例えば、パピルス 46 番では、頁の上方の文字に比べると下方の文字の方が小さくなっていたり、同じ行でも左端よりも右端の文字の方が小さくなっていたりする。ところが、パピルス 66 番では、同一の頁では、ほぼ同じ大きさの文字が並んでいる。全体的に文字も比較的大きく、各頁のレイアウトにも余裕があって読みやすいことから個人で読書することを目的とした写本というよりも朗読に適した写本であったと思われる。

本コデックスの構造は複雑なものである。例えば、パピルス 45 番は、どこを開いても、見開きの頁の繊維の向きが同じとなるのに対して、パピルス 46 番は、繊維の向きが交互に頁毎に入れ替わることが確認できている。パピルス 45 番の場合には、二頁分の大きさのパピルス紙を一枚一枚二つ折りにしたものを重ねて綴じたのに対して、パピルス 46 番の場合には、二頁分の大きさのパピルス紙を全部重ねてから二つ折りにして作成したものである。そういう観点からは、各頁のパピルス紙の繊維の向きが縦であるか横であるかが重要となってくる。

パピルス 66 番の場合には、1 頁目の繊維の向きが縦で（つまり「裏 (verso)」）、見開きの頁の繊維の向きは、少なくとも 34 頁まで同じである。35 頁から 38 頁までは現存しないが、その後 39 頁の繊維は「横 (recto)」で表であるが、その後は見開きの頁の繊維の向きは同じである。具体的に言えば、2 頁と 3 頁は表 (recto) で、4 頁と 5 頁は裏 (verso) である。ところが、110 頁は表 (recto) で 111 頁は裏 (verso) でパピルス紙の繊維の向きが異なるが、112 頁と 113 頁のパピルス紙の繊維の向きはどちらも横で、同じく表 (recto) である。114 頁は裏 (verso) で、115 頁は表 (recto) でまた食い違っている。ところが、116 頁から 125 頁までは見開きの頁の繊維の向きが同じであるが、再び 126 頁と 127 頁では異なっている。以上のように繊維の向きが不規則であることから、コデックスの構造が複雑であったことが容易に想像できる。

ヴィクトール・マルタンは、パピルス 66 番の構造を次のように想定している<sup>11</sup>。

1 帖 5 枚 (=10 葉 =20 頁) 元来の 1 葉目は失われている 1 頁から 18 頁

11 Martin, *Papyrus Bodmer II: Évangile de Jean chap. 1-14*, 10-11.

2 帖	4 枚 (=8 葉 =16 頁)	19 頁から 34 頁
3 帖	1 枚 (=2 葉 =4 頁) 今は失われている	35 頁から 38 頁
4 帖	5 枚 (=10 葉 =20 頁)	39 頁から 58 頁
5 帖	5 枚 (=10 葉 =20 頁)	59 頁から 78 頁
6 帖	8 枚 (16 葉 =32 頁)	79 頁から 112 頁

ところが、本コデックスの写真を注意深く見ると、帖サインが元来の各帖綴じの右上角に記載されていたが、切除されていることがわかる。17 頁には頁数の表示のすぐ脇に >B< と復元することができる跡が確かに残っている。77 頁では何と書いてあるか定かに判別はできないが、R・カッサーは ε (エプシロン) であったと想定して、コデックス全体の構造を以下のように復元することを提案している。

頁と頁の間の保護カバー			
1 帖	4 枚 (=8 葉 =16 頁)	1 頁から 16 頁	8 頁から 9 頁
2 帖	5 枚 (=10 葉 =20 頁)	17 頁から 36 頁	26 頁から 27 頁
最後の葉 (35 頁 36 頁) は失われている			
3 帖	7 枚 (=14 葉 =28 頁)	37 頁から 60 頁	48 頁から 49 頁
最初の葉 (37 頁 38 頁) は失われている			
4 帖	4 枚 (=8 葉 =16 頁)	61 頁から 76 頁	68 頁から 69 頁
5 帖	9 枚? (=18 葉 =36 頁)	77 頁から 112 頁	94 頁から 95 頁
6 帖	4 枚 (=8 葉 =16 頁)	113 頁から 128 頁	ない
7 帖	4 枚 (=8 葉 =16 頁)	129 頁から 144 頁	ない
8 帖	4 枚 (=8 葉 =16 頁)	145 頁から 158 頁 <sup>12</sup>	ない

16 頁の右端と 17 頁の左端、そして 60 頁の右端と 61 頁の左端、76 頁の右端と 77 頁の左端には、綴じ目を外側から守るために貼付された羊皮紙の端切れと思われるものを写真から認めることができる<sup>13</sup>。また、ケルン・パピルス 4274/4298 は、135 頁から 138 頁に渡る断片であるが、表側 (recto) は左側が 136 頁、右側が 137 頁で、裏 (verso) は左側が 138 頁、右側が 135 頁の 1 葉である。上記の復元による

12 以上は Eric G. Turner, *The Typology of the Early Codex*, 70 で紹介されている R. Kasser の見解。

13 筆者が e メールで問い合わせたのに答えて Brent Nongbri が親切に指摘してくださった。

と、7帖の真ん中に位置していたことになるので、上記のコデックスの構造復元が正しいことが傍証される。

以上のように本コデックスが複雑な構造であるので、ヨハネ福音書の本文全部を収め切るためにはどのような大きさの文字で各頁に何行を収めることが妥当であるか写字生は、なかなか判断しかねたために各頁の行数や行毎の文字数などにバラツキが生じたことは想像に難くない。しかし、そもそも、これほどまでに複雑な構造に本コデックスが作成された理由は何であろうか。複数のコデックスが作成されていて、それをまとめて一冊のコデックスに綴じた可能性もある。全く異なる目的のために作成されたコデックスを再利用した結果かもしれないが、あるいは未熟な写字生がヨハネ福音書の本文全体を収めるに適切な大きさのコデックスを作成する際に試行錯誤を繰り返した結果かもしれない。

## 訂正<sup>14</sup>

パピルス 66 番に見出されるもっとも顕著な特徴は、訂正が多いことである。ある特定の箇所には訂正を見出すかどうかは、最終的には解読者の判断にかかっているので、訂正の厳密な数については研究者によって千差万別ではある<sup>15</sup>。概数で 400 前後の訂正が数えられるので、平均すると各頁に二、三の訂正がある計算になる。訂正が多いということは、そもそも写字する際に間違いが多かったと理解することもできる一方で、一旦写字した本文を注意深く確認して、その結果、正確な本文を残すことができたことも意味する<sup>16</sup>。このような理由から、単純に訂正が多いこと

14 パピルス 66 番の本文に数多く訂正した訂正者が複数いた、と想定する学者もいる (Karyn Berner, "Papyrus Bodmer II, P66: A Reevaluation of the Correctors and Corrections" Master's thesis, Wheaton College, 1993; Comfort and Barrett, *The Text of the Earliest New Testament Greek Manuscripts*, 384-87 が、当方には区別がつかないので、同一の訂正者の手に負っていると本稿では想定している。

15 Bruce Metzger and Bart Ehrman (*The Text of the New Testament* [Oxford: Oxford University Press, 2005], 57) には「およそ 440 の変更 (about 440 alterations)」, Gordon Fee (*Papyrus Bodmer II* [Salt Lake City: University of Utah Press, 1968], 57) によると「ほぼ 450 (approximately 450)」で、James Royse は 465 の訂正を数えている (*Scribal Habits*, 409)

16 実際、James Royse は、パピルス 66 番の本文は結果的に新約聖書の初期パピルス写本と比べると間違いが一番少ない写本であることを数値的にも示している。(*Scribal Habits*, 495)

だけから写字生が写字した仕事やパピルス 66 番の本文の質について一概に判断することは避けなければならない。より包括的に検討することが必要である。以下に先ず、本パピルス写本に見られる訂正の仕方を見ることにする。その上で、訂正を分類して詳細に見ていくことにする。写字生が行った訂正は、一言で言えば、書き漏らしたものを書き加えたか、余分に書いたものを削除したか、という加除である。後は、加除の分量に応じて、訂正の加除を頁のどこのスペースを利用するかが異なってくる。写字している最中に間違いに気が付いたので、写字の途中で消したり、加えたりしたことがわかる訂正もある。確かにパピルス 66 番に見出される訂正の数は膨大であるが、綴りなどの書き損じの単純ミスで訂正したものが大部分である。

訂正の分類は容易くない。以下ではジェームズ・ロイズの分類に従って<sup>17</sup>、先ず写字生自らが写字しながら (in scribendo)、気が付いて訂正したと思われる箇所を見る。そして、些細な間違いの訂正を見た上で、意味があると思われる訂正を見ていく。最後に、訂正した結果の本文が独自の読みとなっている箇所をはじめ、複数の底本を参考にして訂正した可能性について探ることにする。

## 1 写字しながら (in scribendo) 訂正したと思われる箇所

1 頁目 15 行目 (1 章 9 節) は ΤΙΖΕΙΠΑΝΤΑ ΛΑΘΡΩΠΟΝΕΡΧΟΜΕΝΟΝ と読み取ることができる。そして、ΠΑΝΤΑ と ΛΑΘΡΩΠΟΝ の間の余白に消えかかった Ν がかるうじて認めることができる。たぶん写字生は、最初 haplography (底本に二つあった α を一つしか書かない) の間違いをして ΠΑΝΤΑΝ(ΘΡΩΠΟΝ) と書いたところで間違いに気がついて、その後に ΛΑΘΡΩΠΟΝ と書いて、Ν を消した (消しきれなかった) ものと思われる。

2 頁 5 行目 (1 章 15 節) で写字生は、ΚΕΚΡΑΓΕΝ と書くべきところに ΚΕ を省略して ΚΡΑ 書いたようである。これは、直前の単語である接続詞 ΚΑΙ の発音が同じために<sup>18</sup>、発音上の haplography を犯したものと思われる。ρ を (不完全に) 消して、α を ε に書き直して、その後に ΚΡΑΓΕΝ と記している。

17 James Royse, *Scribal Habits*, 422-90. ロイズに負っている部分が大いだが、個々の箇所にはあたた上で、確認できたものについてのみ本稿では扱い、ロイズが数え落としているものを加えている場合もあるので、ロイズの計算とは少し異なっている。パピルス 66 番の後半部分で破損が多い箇所では、ロイズが指摘する訂正が確認できないことも多々あった。

18 ヘレニズム時代のギリシア語では、発音上二重母音が区別されなくなり、αι もアイではなくエと発音されることが普通になり、発音上 ε と区別がつかなくなっていた。



11 頁の一番下の 20 行目（3 章 2 節）の終わりに ΟΥΤΟC と書いて消した痕跡が残っている。12 頁 1 行目の冒頭に改めて ΟΥΤΟC と書き記してある。写字生が、一番下の行の終わりから新しい文を始めることは不適切だと判断して、一度は記した ΟΥΤΟC を消して、行末に余白を残して、新しい頁の 1 行目から文を始めるようにしたと思われる。

12 頁 7 行目（3 章 3 節）でヨハネ福音書に頻繁に見られる表現に影響されて、ΛΜΗΝΛΜΗΝΛΕΓΩΥΜΙΝ と書いた直後に間違いに気付いて、ΥΜΙΝ（2 人称複数与格）を消して即座に COI（2 人称単数与格）と正しく書いている。

13 頁 2 行目（3 章 8 節）で写字生は、略記のノミナ・サクラではなくフルに ΠΝΕΥΜΑ を書こうとして、ΠΝΕΥ まで書いて間違いに気がついて ΕΥ を消して横に λ を記して上に横線を引いている。その結果は、ノーメン・サクルム ΠΝ λ であるが、ε と υ の消し方が不完全なために υ と α の間にかろうじて ε と υ を読み取ることができる。

14 頁 5 行目（3 章 16 節）は ΟΝΟΥΤΩCΓΑΡΗ・ΓΑΠ ΗCΕΝΘΕC と読み取ることができる。ヨハネ福音書に頻出するためか、写字生は、ΗΓΑΠΑ と未完了時制を当初書いたが、α を消して、その空白を残したままで横にアオリスト時制の語尾 ΗCΕΝ を記している。

16 頁 16 行目（3 章 31 節）で写字生は ΕΚΤΗCΓΗCΕΚΤΗCΓΗCΕCΤΙΝ まで書いた後に、もう一度目が戻ってしまい、ΟΩΝ(ΕΚΤΗCΓΗCΕΚΤΗCΓΗCΕCΤΙΝ) と同じ文を繰り返すところであったが、ΟΩΝΕΚΤ まで書いたところで間違いに気が付いて 16 行目の行末の ΩΝ を消して ΤΗC ではなく本来の ΤΟΥΟΥΡΑΝΟΥ と続けている。二つの文の間に入るべき部分 (ΚΑΙΕΚΤΗCΓΗCΛΛΕΙ) に挿入の目印を付けて、下方欄外に加えている。

17 頁 20 行目（4 章 5 節）の行末には、写字生の目が移ったために、ΙΑΚΩΒではなく次の行の ΙΩCΗΦ と書きそうになったが、ΙΩ まで書いたところで気がつき、Ω を λ に訂正して残りの ΚΩΒ を書いたものと思われる。ここでは当初書いた Ω を消しつつ、文字輪郭を活用して λ に変更した結果、太めの α になっている。

18 頁 18 行目（4 章 11 節）の行末に最初写字生は前節の ΕΙΠΕΝΛΥΤΗ に影響されたか、次の単語に影響されたかして ΛΕΓΕΙΛΥΤΗ と書いて、間違いに気がつき、η を塗り潰して隣に ω を書いている。ただし、この訂正は、写字しながらの訂正ではなく、写字終了後の訂正であったかもしれない。行末であるために、η を塗り潰した右に書き加えられている ω が心持ち小さい。

20 頁 10 行目 (4 章 21 節) で ΟΥΤΕΕΝ の後にヨハネ福音書で頻出する ΚΟCΜΩ と写字生は書きそうになるが、ΚΟCΜΩ の ο をそのまま利用して、ΟΡΙ と訂正して、ω の上から τ に書き換えている<sup>19</sup>。κ はまだ十分に読み取ることができる。

20 頁 20 行目 (4 章 23 節) では、同じ節の ΠΡΟCΚΥΝΗCΟΥCΙΝ の後にある与格 ΤΩΠΡΙ に影響されたためか、分詞 ΠΡΟCΚΥΝΟΥΤΑC<sup>20</sup> の目的語も ΛΥΤΩ と人称代名詞の与格を書いたところ、間違いに気がついて ΛΥΤΟΝ と対格に訂正している。この訂正も写字しながらではなく、書写終了後の訂正であったかもしれない。

21 頁 13 行目 (4 章 29 節) で写字生は最初 ΙΔΕΤΕ と書いてから、語末の ε を消して α ι とイ化した綴りに「訂正」している。

24 頁 14 行から 15 行にかけて (4 章 48 節) で、写字生は最初 ΠΡΟ で 14 行目を終えて、次の行の冒頭に語末の C を書いているが、気が変わって 15 行目冒頭の C を消して 15 行目の終わりに C を加えている。

26 頁 16 行目 (5 章 9 節) で写字生の目が 8 節の ΚΑΙΠΕΡΙΠΑΤΕΙ から 9 節の ΚΑΙΠΕΡΙΠΑΤΕΙ に移ったので、節の冒頭に ΗΝΔΕ と写字するが、間違いに気付いて ΗΝΔΕ を消して ΚΑΙΕΥΘΕΩC と横に書いて続けている。

27 頁 1 行から 2 行にかけて (5 章 10 節) 写字生は ΕΛΕΓΟΝΟΥΝ と書いた後に目が先の ΕΞΕCΤΙΝCΟΙ に移って CΟΙ と写字したが、間違いに気付いて C を消して ΙΟΥΔΑΙΟΙ と続けている。

27 頁 19 行目から 28 頁 1 行目 (5 章 16 節) で写字生は、最初 19 行目の行の終わりに ΚΑΙΔΙΑΤΟ と書くが、気が変わって ΤΟ を消して、次の 28 頁の 1 行目冒頭に ΤΟΥΤΟ と改めて書いている。

30 頁 6 行目 (5 章 28 節) で写字生は ΕΝΤΗΡΗΜΩ と書写して (1 章 23 節の ΦΩΝΗΒΩΝΤΟCΕΝΤΗΡΗΜΩ の影響か) 間違いに気がついて、先ず ΕΝ の左脇に ΟΙ を加えている。そして、ΕΝΤ を残して ΗΕΡ を ΟΙC に書き直して、η を消して μ は生かして ω を ν に書き直して ΗΜΕΙΟΙC と書いて、結果 ΕΝΤΟΙC ΜΝΗΜΕΙΟΙC を完成している。

19 ΟΡΕΙ が本来の綴りであるが、ΕΙ もヘレニズム時代にはエイと発音しないでイと発音することが普通であったので、発音通りに ΟΡΙ と綴られている。

20 正しい綴りは ΠΡΟCΚΥΝΟΥΝΤΑC で、ν が抜けているパピルス 66 番の綴りは正しくないが、そのまま用いた。

31頁13行目(5章36節)で写字生の目が $\Delta\epsilon\Delta\omega\kappa\epsilon\kappa\epsilon\iota$ から $\lambda\pi\epsilon\sigma\tau\alpha\lambda\lambda\kappa\epsilon\iota$ まで移ったために $\kappa\lambda\iota$ と書こうとして $\kappa$ を書いた時点で間違いに気付いて $\kappa$ を消して、 $\Delta\epsilon\Delta\omega\kappa\epsilon\kappa\epsilon\iota$ の続きの $\mu\omicron\iota$ に進んでいる。

33頁19行目(6章5節)で写字生はイ化した綴りである $\epsilon\rho\chi\epsilon\tau\epsilon$ を $\epsilon\rho\chi\epsilon\tau\alpha\iota$ と訂正している。

34頁6行目(6章7節)で(たぶん $\omicron\gamma\kappa\alpha\rho\kappa\omicron\upsilon\sigma\iota\kappa\iota\kappa\iota$ の影響で) $\lambda\gamma\tau\omicron\upsilon$ と書いたようであるが、即座に $\upsilon$ を消して $\iota\sigma$ と続けて $\lambda\gamma\tau\omicron\iota\sigma\iota$ に訂正している。

34頁19行目(6章11節)で $\epsilon\gamma\chi\alpha\rho\iota\theta\iota\varsigma\lambda\alpha\varsigma$ の最後の $\sigma$ を二つ書いたが、即座に後の $\sigma$ を $\epsilon$ に書き直して $\epsilon\Delta\omega\iota\kappa\epsilon\kappa\epsilon\iota$ の冒頭の $\epsilon$ に訂正している。

42頁7行目(6章60節)で写字生が当初書き記した文字を判読することは困難である。たぶん $\tau\omega\nu\mu\alpha\theta\eta\tau\omega\nu$ (あるいは $\omicron\iota\mu\alpha\theta\eta\tau\alpha\iota$ )と書いたところ即座に間違いに気付いて、 $\lambda\kappa\omicron\upsilon\varsigma\alpha\nu\tau\epsilon\varsigma\epsilon\kappa$ と書き直して、次行の冒頭に $\tau\omega\nu\mu\alpha\theta\eta\omega\nu\epsilon\iota\pi\omicron\nu$ と続けて書写している。

42頁16行目(6章63節)で写字生は $\pi\nu\epsilon\gamma\mu\alpha$ と書こうとして $\pi\nu\epsilon\gamma$ まで書いた時点でノーメン・サクルムであることに気付いて、 $\epsilon\gamma$ を $\lambda$ に書き直して、上に横線を引いてノーメン・サクルムに訂正している。13頁2行目(3章8節)を参照のこと。

43頁1行目(6章64節)で写字生の目が先に移って $\gamma\mu\omega\nu\omicron\iota\omicron\upsilon\pi\iota\varsigma\tau\epsilon\upsilon$ ではなく、 $\gamma\mu\omega\nu\omicron\iota\mu\eta\pi\iota\varsigma\tau\epsilon\upsilon$ と写字して、次の行の冒頭 $\sigma$ で始めて $\pi\iota\varsigma\tau\epsilon\upsilon\varsigma\alpha\nu\tau\epsilon\varsigma$ と書こうとしていたようである。しかし、間違いに気付いて写字生は、先ず $\mu\eta$ を消して $\omicron\upsilon$ と書き直して、次の行の冒頭の $\sigma$ も消して $\pi\iota\varsigma\tau\epsilon\upsilon\omicron\upsilon\varsigma\iota\kappa\iota$ と直している。

45頁4行目(7章8節)では、 $\gamma\mu\epsilon\iota\varsigma$ を書いた後に目が次行に移ったようで、 $\lambda\alpha\nu\beta\alpha\iota\nu\omega$ と書こうとして $\lambda\alpha\nu\beta\alpha$ まで書いて間違いに気付いて、 $\alpha$ を $\eta$ に訂正している。

49頁6行目(7章33節)は複雑である。当初、写字生は前の行の最後に $\pi\rho\omicron\sigma\tau\omicron\nu$ と書いて6行で $\mu\epsilon$ と書いて、その後 $\pi\epsilon\mu\psi\lambda\alpha\tau\lambda$ と続けようとしていた。そこで語順の間違いに気付いて、6行冒頭に書いた $\mu\epsilon$ を生かして $\pi\epsilon\mu\psi\lambda\alpha\tau\lambda$ と訂正するために $\epsilon$ を消して、 $\mu$ の左に $\pi$ を書き加えて、 $\pi$ と $\mu$ の間、上方に $\epsilon$ を書き込んでいる。その際、最初、なぜか $\psi\psi\lambda\alpha\tau\lambda$ と書いて、二つ目の $\psi$ を $\lambda$ にかきおしている。以上の結果が、 $\pi^{\epsilon}\mu\psi\lambda\alpha\tau\lambda\mu\epsilon$ であるが、冒頭の $\pi$ が左側に頭一つ飛び出していることも、前の $\alpha$ の下に不可解な横棒がかろうじて読

み取ることができることも説明がつく。

50 頁 18 行目 (7 章 44 節) の行末に  $\epsilon\pi\epsilon\beta\alpha\lambda$  まで書いて、どこで行を終えるか気が変わって、 $\lambda$  を消して、次の行を  $\lambda$  から始めて  $\lambda\epsilon\eta$  と単語を終えている。

55 頁 1 行目 (8 章 28 節) で写字生は、 $\sigma\tau\alpha\eta$  を書いた後に目が次の行の  $\lambda\eta\theta\rho\omega\pi\omicron\gamma$  に移ったために、 $\theta$  を書いたが、間違いに気付いた写字生は、 $\theta$  を消して、その横に  $\gamma\psi\omega\chi\eta\tau\alpha\iota$  と書いている。

56 頁 3 行目 (8 章 34 節) で、写字生は前節の  $\lambda\pi\epsilon\kappa\rho\iota\eta\eta\pi\rho\omicron\varsigma\lambda\gamma\tau\omicron\eta$  に影響されて、先ず人称代名詞の男性単数形  $\lambda\gamma\tau\omega$  を書いたところ、続ける前に間違いに気付いて  $\omega$  を  $\omicron\iota$  に書き直して  $c$  を加えて複数形  $\lambda\gamma\tau\omicron\iota\varsigma$  に訂正している。

57 頁 9 行目 (8 章 42 節) の訂正はノミナ・サクラを巡る混乱から生じている。写字生は、 $\theta\epsilon$  と書くべきところ  $\gamma\epsilon$  と書き始めようとして、 $\gamma$  を書いた時点で間違いに気付いて、 $\gamma$  を消した後右に  $\theta\epsilon$  と続けている。

57 頁 12 行目 (8 章 42 節) で写字生は  $\epsilon\mu\lambda\gamma\tau\omicron\gamma$  と書き終えた直後に (11 行から 12 行にかけて)、目が移って後戻りしてしまい、もう一度  $\epsilon\mu\lambda\gamma\tau\omicron\gamma$  と書きそうになっている。 $\epsilon$  と  $m$  を書いた時点で間違いに気付いたので、 $m$  を消して、その脇に  $\lambda\eta\lambda\gamma\theta\alpha$  と書いて  $\epsilon\lambda\eta\lambda\gamma\theta\alpha$  と書き終えている。

63 頁 7 行目 (9 章 19 節) で、当初写字生は男性単数対格の人称代名詞  $\lambda\gamma\tau\omicron\eta$  を書いたが、先に進む前に間違いに気付いて、 $\nu$  を消して、その横に  $\nu$  と  $\sigma$  を書いて男性複数対格の  $\lambda\gamma\tau\omicron\iota\varsigma$  を完成した。

66 頁 17 行目 (9 章 41 節) で、写字生は  $\lambda\mu\alpha\rho\tau\iota\alpha$  と格闘している。先ず、最初の文字である  $\lambda$  を二度  $\lambda\lambda$  と書いたが、すぐに間違いに気付いて、前の  $\lambda$  を消して右に  $m$  を書いて、 $\lambda\mu\alpha\rho\tau\iota\alpha$  を完成しようとした。そこで再び目が元に移って  $\lambda\mu\lambda m$  と  $\delta\iota\tau\tau\omicron\gamma\rho\alpha\pi\eta\psi$  の間違いを犯している。即座に間違いに気付いた写字生は、2 つ目の  $m$  を消して、その上から  $p$  を書いて、続きを書いて  $\lambda\mu\alpha\rho\tau\iota\alpha$  を完成している<sup>21</sup>。

69 頁 10 行目 (10 章 15 節) でも写字生の目が前の  $\tau\omega\eta$  から後の  $\tau\omega\eta$  に移ってしまい ( $\tau\omega\eta$   $\pi\rho\omicron\beta\alpha\tau\omega\eta$ )、 $\kappa\lambda\iota\alpha\lambda\lambda\alpha$  と書こうとして  $\kappa\lambda$  まで書いていたので 2 文字を消して、 $\pi\rho\omicron\beta\alpha\tau\omega\eta$  を書いている。

73 頁 4 行目 (10 章 37 節) で、写字生は  $\pi\iota\varsigma\tau\epsilon\gamma\epsilon\tau\epsilon$  を書写する前に  $m\omicron\iota$  を書こうとして  $m$  を書いた時点で間違いに気付いて  $m$  を消して横に  $\pi\iota\varsigma\tau\epsilon\gamma\epsilon\tau\epsilon$ <sup>22</sup>

21 ロイズは、この箇所の訂正を二つに区別して扱っている (*Scribal Habits*, 429, 866)

22 実際には  $\pi\iota\varsigma\tau\epsilon\gamma\epsilon\tau\alpha\iota$  が書写されているが、発音は  $\pi\iota\varsigma\tau\epsilon\gamma\epsilon\tau\epsilon$  と同じ。

MOI と書写している。

73 頁 8 行目 (10 章 38 節) で写字生は  $\epsilon\overset{\dots\dots}{\text{NT}}\omega\pi\rho\iota$ <sup>23</sup> を書くべきところ目が前の行に移ってしまい、 $\epsilon\overset{\dots\dots}{\text{NE}}\text{MOI}$  と書こうとして  $\epsilon\overset{\dots\dots}{\text{NE}}\text{M}$  まで書きかけたところで  $\epsilon$  を消して正しく  $\tau\omega\pi\rho\iota$  を書き直している。

74 頁 3 行目 (11 章 1 節) で写字生の目移って戻ったために ( $\mu\alpha\rho\iota\sigma\kappa\alpha\iota\mu\alpha\rho\theta\lambda\varsigma$ ) もう一度  $\mu\alpha\rho\iota\lambda\varsigma$  と書いたところで間違いに気付いて  $\iota$  を消して心持ち上方に  $\theta$  を書いて  $\mu\alpha\rho\theta\lambda\varsigma$  と訂正している。

84 頁 8 行～9 行目 (12 章 1 節) で、どうやら写字生は  $\epsilon\mathfrak{z}$  の  $\epsilon$  を数字の 5 と誤解して  $\pi\epsilon\text{NTE}$  (実際には 8 行目の行末に  $\pi\epsilon$ 、そして次の行の冒頭に  $\tau\epsilon$ ) と写字しようとしたが、 $\mathfrak{z}$  を見て、その意味を理解して間違いに気付いた写字生は、9 行目冒頭の  $\tau\epsilon$  に手を加えて  $\epsilon\mathfrak{z}$  と書き直して、前の行の行末の  $\pi\epsilon$  は消している。

89 頁 8 行目 (12 章 23 節) で写字生は  $\epsilon\lambda\eta\lambda\theta\epsilon\text{N}$  と書こうとして (頻出する  $\eta\lambda\theta\epsilon\text{N}$  の影響か)  $\epsilon\lambda\eta\lambda$  と書いて、 $\theta$  を書きかけの段階で消して横に  $\gamma\theta\epsilon\text{N}$  と続けた。 $\lambda$  と  $\gamma$  の間に空白が残り、 $\theta$  の書きかけをかりうじて認めることができる。

99 頁 13 行目 (13 章 19 節) で写字生は  $\text{OTI}$  ではなく  $\text{OC TIC}$  と書こうとしたが、 $\text{OC TIC}$  まで書いて間違いに気付いて、 $\text{C}$  を消して続けている。あるいは、 $\text{OC TIC}$  まで書いて前の  $\text{C}$  は消して、後ろの  $\text{C}$  は  $\epsilon$  に書き直したかもしれない。

100 頁 1 行目 (13 章 20 節) で写字生は、たぶん直前 (99 頁の一番下の行である 16 行目) の  $\text{O DE EME LABANON}$  ( $\text{o de eme labanwn}$ ) に影響されて、 $\text{TON PEMPSANTAME}$  ( $\text{ton pempsanta me}$ ) の代わりに明らかに  $\text{TON ME PEMPSANTA}$  ( $\text{ton me pempsanta}$ ) と書こうとしていた。ところが、 $\text{TON ME}$  まで書いた時点で間違いに気付いて、 $\epsilon$  を消して、 $\text{TON}$  と  $\text{M}$  の間の上方に  $\pi\epsilon$  を挿入した。そして、 $\psi\lambda\text{NTAME}$  と続けた。49 頁 6 行目 (7 章 33 節) と類似している。

101 頁 16 行目から 102 頁 1 行目 (13 章 32 節) で、本文のどこで 101 頁を終えるか、写字生は気が変わったようである。一度は写字した  $\kappa\lambda\iota$  を消して、102 頁の 1 行目から 32 節の冒頭を始めている。写字生は、接続詞  $\kappa\lambda\iota$  を二度書く dittography の間違いを犯した可能性もある。

105 頁 9 行目 (14 章 10 節) で写字生の目移って前に戻ったために  $\epsilon\text{N}$  を二度書く dittography を犯した。即座に気付いて、 $\epsilon\text{NEN}$  の後ろの  $\text{N}$  を消して、横に

23  $\overset{\dots\dots}{\pi\rho\iota}$  はノーメン・サクルムで  $\pi\alpha\tau\rho\iota$  の略記。

ΕΜΟΙ の残り ΜΟΙ を書写している。

105 頁 13 行目 (14 章 12 節)<sup>24</sup> で写字生が λΜΗΝλΜΗΝ (αμην αμην) と書いておるときに、なぜか繰り返す必要はないと二つ目の λΜΗΝ の λΜΗ まで書いた時点で手を止めて、λΜΗ の三つの文字の上に点を書き込んで消した上で、λεγω と先を続けた。ところが、後の確認作業中に λΜΗΝ は 2 回繰り返す必要があることに気付いて、削除の意味で文字の上に書いた点を消して、語末の Ν を上方に書き込んで、二つめの λΜΗΝ を本文に戻した。

105 頁 16 行目 (14 章 12 節) で写字生の目移って前に戻ってしまい (κλκεινοςποιησαι), 16 行冒頭にもう一度 κλκεινος と書こうとして κλκε まで書いたときに間違いに気付いて、κλ を消して、κε の ε を λ に書き直して κλλ にして、次の ΜΙΖΟΝ を書いている。

112 頁 10 行目 (15 章 10 節) で写字生は、1 人称属格の人称代名詞が繰り返されたためか ΜΕΝΩ の後に ΜΟΥ を書きそうになって Μ を書いた後に間違いに気付いて Μ を消して、αΥΤΟΥ を書いている。

113 頁 2 行目 (15 章 13 節) で写字生は、περιτωνφιλων (περι των φιλων) に影響されて、αΥΤΩ と書いたが、即座に間違いに気付いて αΥΤΟΥ と訂正して次に進んでいる。

119 頁<sup>25</sup> (16 章 25 節) で写字生は、.....  
πρς (πατρος) を書いた後に目移って書写している箇所を見失ったようで前の行の λαλησω υμιν (λαλησω υμιν) を再び写字した。そこで間違いに気がついて改めて απαγγελωμιν (απαγγελω υμιν) と続けている。

以上、写字しながら訂正した痕跡を 48 箇所に見出すことができた<sup>26</sup>。興味深いことに、パピルス 66 番には書写しながらの訂正が一貫して見出されるにも拘わらず、16 章 25 節以降には、書写しながら訂正した例は見当たらない。写字生が書写し終えたいという気持ちが強すぎて訂正する手間暇を惜しんだことがひとつ理由として

24 2 回の訂正が加えられているので、1 単語を省略した間違いを犯した箇所でも訂正して付加した項でも取り挙げている。

25 119 頁は破損が大きく、該当箇所が何行目にあたるか (推測することは可能であるが) 不詳である。

26 ロイズは、9 章 41 節に二つの訂正を見出すので、49 箇所を数えている (Scribal Habits, 429)。

考えられる。もうひとつには、写本の状態が余りにも断片的で訂正の痕跡を見出すこと自体が困難となっていることも無関係ではないであろう。

## 2 書き損じなど些細なミスの訂正

単なる「イ化」(または「イオータ化」)現象が見出されることから、何百もの単語を非標準的に(イ化)書きつつも、写字生が正しい綴りで写字しようと綴りを訂正していることは興味深い。二つ  $\lambda$  があるところに一つしか書かなかったり、一つの  $\lambda$  のところに二つ書いたりした間違いを正している。前者は、22 頁 17 行目(4 章 37 節)の  $\lambda\lambda\lambda\text{OC}$  が該当する。後者は、53 頁 3 行目から 4 行目にかけて(8 章 17 節)の  $\lambda\lambda\text{H}\Theta\text{HC}$  です。前項の書写しながらの訂正よりも多い、59 の例が見出される<sup>27</sup>。

次に、意味が通じない読みが訂正されている箇所が 101 ある。そのうち目が移って文字を省略した間違いを訂正した箇所は、50 数えることができる<sup>28</sup>。1 語以上の単語を省略した間違いを訂正した箇所は、7 つある<sup>29</sup>。余分な文字を加えた間違いを訂正した箇所が 5 つ見つかっている。行末の文字を次の行の冒頭に繰り返す間違い(dittography)が訂正されている箇所が 2 つある。1 単語以上を繰り返す間違い(dittography)が訂正されている箇所が 3 つある。その他の無意味な間違いが訂正されているところは 21 箇所を数えることができる<sup>30</sup>。訂正前の本文が不詳であったり、どのような間違いがあったか定かでなかったりする箇所は 13 数えることができる。以上、書き損じなどの訂正は、計 160 を数えることができる。

## 3 意味ある訂正

意味ある訂正が施されている箇所には、付加の間違いが訂正された箇所と省略の間違いが訂正された箇所の両方がある。付加の間違いが訂正された箇所は 12 あるが、省略の間違いが訂正された箇所は 60 ある。付加の間違いの場合は 1 単語に限

27 ロイズは 61 箇所を数えているが、そのうち 19 章 39 節と 40 節については確認できなかったので、59 箇所となった(*Scribal Habits*, 437-39)

28 ロイズは 52 箇所を列挙しているが、そのうち 17 章 10 節と 26 節については確認することができなかった。

29 ロイズが指摘している 17 章 13 節(*Scribal Habits*, 440) は確認できなかった。

30 ロイズは 22 箇所を数えている。15 章 16 節に訂正を認めることはできるが、ここでロイズが見出したと主張する訂正が定かでないので、数には入れなかった。



られるが、省略の間違ひの場合には 1 単語から 8 単語までの例が見出される。

付加の間違ひが訂正されたうちでもっとも多い付加された語は接続詞である。32 頁 12 行目 (5 章 43 節) と 42 頁 17 行目 (6 章 63 節) では  $\Delta\epsilon$ 、94 頁 8 行目 (12 章 45 節) と 100 頁 1 行目 (13 章 20 節) と 135 頁 14 行目 (19 章 11 節) では  $\kappa\lambda\iota$ 、の接続詞がそれぞれ付加されているので、削除するように訂正がなされている。

冠詞が間違っ付加されている箇所は、52 頁 2 行目 (7 章 52 節) 冒頭の  $\text{ΠΡΟΦΗΤΗΣ}$  の前に付加されている冠詞と 72 頁 13 行目 (10 書 33 節) の  $\overset{\dots\dots}{\Theta\text{Ν}}$  (つまり  $\Theta\epsilon\text{ΟΝ}$ ) の前に付加された冠詞が削除されている。代名詞が付加されたが、削除の訂正がなされている箇所が 2 箇所あり (61 頁 7 行目 [9 章 8 節] で人称代名詞と 113 頁 19 行目 [15 章 19 節] で指示代名詞)、その他、前置詞 (110 頁<sup>31</sup> [15 章 3 節] で前置詞  $\epsilon\text{Ν}$ ) と形容詞 (120 頁 8 行目 [16 章 32 節] で  $\text{ΠΑΝΤΕ}\varsigma$ ) と副詞 (7 頁 4 行目 [1 章 49 節] で  $\lambda\lambda\eta\theta\omega\varsigma$ ) が間違っ付加されたが、削除の訂正が施されている。

1 単語が省略されていて訂正で付加されている箇所は 47 箇所ある。冠詞が省略されていて、訂正で付加された箇所は以下の 10 箇所ある。

- 11 頁 16 行目 (2 章 25 節)
- 14 頁 16 行目 (3 章 19 節)
- 19 頁 3 行目 (4 章 12 節)
- 30 頁 6 行目 (5 章 28 節)
- 39 頁 22 行目 (6 章 42 節)
- 47 頁 7 行目 (7 章 22 節)
- 127 頁 11 行目 (18 章 12 節)
- 133 頁 14 行目 (18 章 40 節)
- 142 頁断片 C (19 章 39 節)
- 149 頁断片 C (20 章 30 節)

接続詞が省略されていて訂正で付加された箇所は以下の 12 箇所ある。

---

31 断片であるので、行数は不明。



7頁18行目(2章2節)  
15頁2行目(3章21節)  
29頁2行目(5章22節)  
48頁7行目(7章28節)  
58頁19行目(8章50節)  
68頁1行目(10章7節)  
79頁12行目(11章34節)  
84頁12行目(12章2節)  
98頁16行目(13章15節)  
117頁14行目(16章19節)  
118頁13行目(16章22節)  
123頁15行目(17章19節)

代名詞が省略されていて、訂正で付加された箇所は13ある。

11頁1行目(2章20節)  
31頁13行目(5章36節)  
41頁6行目(6章52節)  
42頁8行目(6章60節)  
58頁8行目(8章46節)  
66頁10行目(9章39節)  
72頁1行目(10章29節)  
74頁16行目(11章5節)  
105頁16行目(14章12節)  
112頁8行目(15章10節)  
114頁13行目(15章22節)<sup>32</sup>  
115頁1行目(15章25節)  
125頁10行目(18章2節)

名詞が省略されていて、訂正で付加されている箇所は2つある。

---

32 判別は難しいが、欠損部分あたりにかろうじて認めることができる。

79 頁 12 行目 (11 章 34 節)

83 頁 10 行目 (11 章 54 節)

動詞が省略されていて、訂正で付加されている箇所は 4 つある<sup>33</sup>。

16 頁 17 行目 (3 章 31 節)

84 頁 14 行目 (12 章 2 節)

133 頁 13 行目 (18 章 40 節)

136 頁 14 行目 (19 章 15 節)

前置詞が省略されていて、訂正で加えられている箇所は 4 つある。

45 頁 8 行目 (7 章 9 節)

75 頁 1 行目 (11 章 6 節)

81 頁 10 行目 (11 章 45 節)

122 頁 15 行目 (17 章 12 節)

副詞が省略されていて、訂正で付加されている箇所は 2 つある。

105 頁 8 行目 (14 章 10 節)

105 頁 13 行目 (14 章 12 節)<sup>34</sup>

1 語よりも多くの単語が省略され、付加して訂正された箇所は 14 見出される。

2 語の場合は 2 箇所。

33 頁 10 行目 (6 章 1 節)

136 頁 12 行目 (19 章 14 節)

---

33 ロイズは、動詞 *ei* が 18 章 17 節 (128 頁) に訂正で付加されていると言うが、確認できないので、本稿では数えていない (*Scribal Habits*, 446, 874)。

34 写字しながら (*in scribendo*) の訂正の項も参照のこと。同じ語について 2 回訂正されているので 2 箇所で取り挙げている。

3語の場合も2箇所。

126頁3行目(18章5節)

136頁9行目(19章13節)<sup>35</sup>

4語の箇所は2つある。

14頁11行目(3章17節)

139頁(19章28節)<sup>36</sup>

5語の箇所は2つある。

39頁14行目(6章40節)<sup>37</sup>

122頁12行目(17章11節)<sup>38</sup>

6語の箇所は2つある<sup>39</sup>。

43頁2行目(6章64節)

137頁4行目(19章17節)

7語の箇所は2つある。

116頁(16章7節)<sup>40</sup>

123頁7行目(17章14節)<sup>41</sup>

8語の箇所は2箇所である<sup>42</sup>。

---

35 訂正のために付加する3語は上方の欄外に記載されている。

36 訂正するために付加される4語は下方の欄外に記載されている。

37 上方の欄外に記載されている訂正のために付加される単語は、欠損部分があるために明確に5語を確認することはできないが、挿入されるべき単語は5と想定できる。

38 122頁12行目(17章11節)に挿入記号を認めることができるが、訂正で付加する単語の記載は欠損箇所にあたっている。

39 ロイズは19章5節に見出せると言う(*Scribal Habits*, 448, 874)が、写本の134頁は損傷が激しくて確認できない。

40 訂正する箇所そのものは残存しないが、訂正で付加する部分を記載した上方の欄外部分は残っている。

41 なぜかロイズは17章14節には言及していないが、該当する箇所である。

42 8語であるとロイズは主張するが、どちらも破損が激しく単語数までは定かではない。

122 頁上方欄外 (17 章 8 節)

128 頁 4 行目 (18 章 15 節)

終わりの方の数章は写本が断片的にしか残存しないにも拘わらず、写字生が書写の仕事が終わりに近づくにつれて長い省略がより頻繁に起こる傾向が認められる。ところが、7 章から 15 章にかけては、1 語よりも多い単語の省略が訂正されている箇所は見当たらない。実際、6 章では写字生が 1 節と 40 節と 64 節と 3 つの長い省略を訂正し、16 章から 19 章にかけては長い省略を訂正している箇所が 9 もある。目が先に移って間の語を省略する間違いが比較的に頻繁に起こったことが確認できる。

長い省略が訂正されている箇所の中には、必ずしも目が移った結果ではなく、長い省略が生じた箇所があり、興味深い。断片的にしか残っていない最後の 5 章に見出されることから、さらに長い省略が欠損した部分にあった可能性も想定することはできる。省略されても意味が不明瞭にならない句を選んで、写字生が意図的に省いて本文を縮めようとした結果であるかもしれない。あるいは、速く書写の仕事を終えたいと写字生の気が急いたために偶発的に生じた省略であったかもしれない。省略された文字数にある程度の規則性が認められることから、写字生が先を急ぐ余り、1 行や 2 行を省略した可能性も否定しきれない。

10 箇所て語順が訂正されている。2 例を除くと皆 2 語の入れ替えである。

9 頁 4 行目 (2 章 11 節) // Ἀρχὴν ἔποιησεν

18 頁 11 行目 (4 章 9 節) // λίτεις πείν

26 頁 4 行から 5 行 (5 章 5 節) // ἔτη λή<sup>43</sup>

34 頁 12 行目 (6 章 9 節) // τί ἐστιν ταῦτα

61 頁 15 行目 (9 章 10 節)

COY HNEΩXΘHCAN → HNEΩXΘHCAN COY

67 頁 10 行から 11 行 (10 章 4 節) // ἐκβαλὴ πάντα

103 頁 13 行目 (14 章 2 節) // ἄν εἶπον

113 頁 10 行目 (15 章 16 節) // ἰνα ὕμας

43 λで 30, ηで 8, 合わせて 38 のこと。ノミナ・サクラを同じように、上に横線を引くのが習慣である。

52 頁 1 行目から 2 行目にかけて (7 章 52 節) <sup>44</sup>

// ΕΚ ΤΗΣ ΓΑΛΙΛΑΙΑΣ Ο ΠΡΟΦΗΤΗΣ

65 頁 6 行目 (9 章 30 節) // ΚΑΙ ΕΙΠΕΝ Ο ΛΑΝΟΣ, ΛΥΤΟΙΣ

以上のうち 2 章 11 節と 6 章 9 節と 10 章 4 節では、目が移って生じた間違いを当初訂正したために語順が入れ替わったのを最終的に訂正した、と考えられる。

9 頁 4 行目 (2 章 11 節) ΤΑΥΤΗΝ ΕΠΟΙΗΣΕΝ ΑΡΧΗΝ

34 頁 12 行目 (6 章 9 節) ΑΛΛΑ ΤΑΥΤΑ ΤΙ ΕΣΤΙΝ

67 頁 10 行から 11 行 (10 章 4 節) ΙΔΙΑ ΠΑΝΤΑ ΕΚΒΑΛΗ

単語が入れ替わっていた間違いを訂正した箇所が 41 ある。まず、動詞の語形の間違いが訂正されている箇所が 12 ある。

13 頁 6 行目 (3 章 8 節) ΓΕΝΗΜΕΝΟΣ → ΓΕΓΕΝΝΗΜΕΝΟΣ

18 頁 3 行目 (4 章 6 節) ΕΚΛΘΙΖΕΤΟ → ΕΚΛΘΕΖΕΤΟ

25 頁 19 行目 (5 章 2 節) Η ΕΣΤΙΝ ΛΕΓΟΜΕΝΗ → Η ΕΠΙ ΛΕΓΟΜΕΝΗ

55 頁 4 行から 5 行にかけて (8 章 28 節)

ΕΔΕΙΞΕΝ ΜΟΙ → ΕΔΕΙΔΑΞΕΝ ΜΕ(Ι) (ΕΔΙΔΑΞΕΝ ΜΕ)

57 頁 2 行目 (8 章 40 節) ΛΕΛΑΛΗΚΕΝ → ΛΕΛΑΛΗΚΑ(Ν)

58 頁 13 行目 (8 章 48 節) ΕΛΕΓΟΜΕΝ → ΛΕΓΟΜΕΝ

73 頁 5 行目 (10 章 38 節) ΠΙΣΤΕΥΧΤΑΙ → ΠΙΣΤΕΥΗΤΑΙ

85 頁 5 行目 (12 章 3 節) ΕΠΛΗΡΟΥΤΟ → ΕΠΛΗΡΩΘΗ

90 頁 6 行目 (12 章 26 節) ΕΣΤΙΝ → ΕΣΤΕ (ΕΣΤΑΙ)

108 頁 6 行目 (14 章 23 節) ΕΙΣΕΛΕΥΟΜΕΘΑ → ΕΛΕΥΟΜΕΘΑ

111 頁 14 行目 (15 章 7 節) ΜΕΝΕΙ → ΜΕΙΝΗ

112 頁 7 行目 (15 章 10 節)

ΤΗΡΗΤΑΙ (ΤΗΡΗΤΕ) → ΤΗΡΗΧΤΑΙ (ΤΗΡΗΧΤΕ)

動詞の語形以外の単語の入れ替え間違いが訂正されている箇所は 29 ある。

44 ロイズは、ここで取り挙げていない。

10 頁 1 行目 (2 章 15 節)  $\kappa\lambda\iota \rightarrow \tau\lambda^{45}$

17 頁 8 行目 (3 章 36 節)  $\lambda\lambda\lambda\lambda \rightarrow \lambda\lambda\lambda \text{ H}$

18 頁 3 行目 (4 章 6 節)  $\tau\eta \text{ ΓΗ} \rightarrow \tau\eta \text{ ΠΗΓΗ}$

18 頁 11 行目 (4 章 9 節)  $\pi\alpha\rho\alpha \text{ ΜΟΥ} \rightarrow \pi\alpha\rho \text{ ΕΜΟΥ}$

23 頁 14 行目 (4 章 42 節)  $\lambda\gamma\tau\omicron\varsigma \rightarrow \omicron\gamma\tau\omicron\varsigma$

31 頁 14 行目 (5 章 36 節)  $\tau\lambda\gamma\tau\alpha \rightarrow \lambda\gamma\tau\alpha$

31 頁 19 行目 (5 章 37 節)  $\pi\omicron\tau\epsilon \rightarrow \pi\omega\pi\omicron\tau\epsilon$

39 頁 21 行目 (6 章 42 節)  $\omicron\tau\iota \rightarrow \omicron\gamma\chi$

39 頁 23 行目 (6 章 42 節)  $\mu\eta\tau\epsilon\rho\alpha\lambda\lambda\alpha\iota \rightarrow \mu\eta\tau\epsilon\rho\alpha$

42 頁 18 行目 (6 章 63 節)  $\rho\eta\mu\alpha \rightarrow \rho\eta\mu\alpha\tau\alpha$

46 頁 15 行目 (7 章 18 節)  $\mu\epsilon \rightarrow \lambda\gamma\tau\omicron\lambda$

49 頁 19 行目 (7 章 37 節)

$\tau\eta\varsigma \text{ ΜΕΓΑΛΗΣ ΕΟΡΤΗΣ} \rightarrow \tau\eta \text{ ΜΕΓΑΛΗ ΤΗΣ ΕΟΡΤΗΣ}$

50 頁 7 行目 (7 章 40 節)

$\pi\omicron\lambda\lambda\omicron\iota \text{ ΕΚ ΤΟΥ ΟΧΛΟΥ ΟΙ} \rightarrow \text{ΕΚ ΤΟΥ ΟΧΛΟΥ ΟΥΝ}$

50 頁 19 行目 (7 章 44 節)  $\lambda\gamma\tau\omega \rightarrow \lambda\gamma\tau\omicron\lambda$

52 頁 10 行目 (8 章 14 節)  $\gamma\epsilon \rightarrow \epsilon\gamma\omega$

59 頁 17 行目 (8 章 56 節)  $\lambda\beta\rho\alpha\mu \rightarrow \lambda\beta\rho\alpha\lambda\mu$

68 頁 1 行目 (10 章 6 節)  $\tau\iota \rightarrow \tau\iota\lambda\alpha \text{ ΗΝ } \lambda$

74 頁 7 行から 8 行にかけて (11 章 2 節)

$\kappa\lambda\iota \lambda\delta\epsilon\lambda\phi\omicron\varsigma \text{ ΗΝ } \lambda\lambda\zeta\lambda\rho\omicron\varsigma \lambda\varsigma\theta\epsilon\lambda\omega\lambda\alpha\iota$

$\rightarrow \omicron \lambda\delta\epsilon\lambda\phi\omicron\varsigma \lambda\lambda\zeta\lambda\rho\omicron\varsigma \text{ ΗΘΕΛΕΙ}$

74 頁 8 行目から 9 行まで (11 章 3 節)

$\lambda\pi\epsilon\sigma\tau\iota\lambda\epsilon\lambda\alpha\iota \text{ (}\lambda\pi\epsilon\sigma\tau\epsilon\iota\lambda\epsilon\lambda\alpha\iota\text{)} \text{ ΟΥΝ } \mu\alpha\rho\iota\alpha \text{ ΠΡΟΣ } \lambda\gamma\tau\omicron\lambda \text{ ΛΕΓΟΥΣΑ}$

$\rightarrow \lambda\pi\epsilon\sigma\tau\iota\lambda\alpha\lambda\alpha\iota \text{ ΟΥΝ } \lambda\iota \lambda\delta\epsilon\lambda\phi\lambda\iota \text{ ΠΡΟΣ } \lambda\gamma\tau\omicron\lambda \text{ ΛΕΓΟΥΣΑΙ}$

75 頁 3 行目 (11 章 7 節)  $\lambda\gamma\tau\omicron\iota\omicron\varsigma \rightarrow \tau\omicron\iota\omicron\varsigma \text{ ΜΑΘΗΤΑΙΣ}$

77 頁 6 行目 (11 章 21 節)  $\kappa\lambda\iota \text{ (kurion)} \rightarrow \iota\lambda\alpha \text{ (ΙΗΣΟΥΝ)}$

87 頁 13 行目 (12 章 15 節)  $\pi\omega\lambda\omicron\gamma \rightarrow \pi\omega\lambda\omicron\lambda$

88 頁 1 行目 (12 章 16 節)  $\text{H} \rightarrow \text{HN}$

92 頁 11 行目 (12 章 37 節)  $\tau\lambda\gamma\tau\alpha \rightarrow \tau\omicron\varsigma\lambda\gamma\tau\alpha$

---

45 ロイズは  $\kappa\lambda\iota$  が  $\tau\epsilon$  に訂正されたとする (*Scribal Habits*, 453) が、たぶん  $\tau\epsilon$  の前に記されていた接続詞  $\kappa\lambda\iota$  が  $\tau\lambda$  に訂正されたものと思われる。

100 頁 11 行目から 12 行目にかけて (13 章 24 節)

? <sup>46</sup> → ΠΥΘΑΓΟΡΑΙ ΤΙΣ ΑΝ ΕΙΗ

108 頁 6 行目 (14 章 23 節) ΠΑΡΑ → ΠΡΟΣ

122 頁 11 行目 (17 章 11 節) ΜΟΥ → ΟΥ

122 頁 14 行目 (17 章 12 節) ΜΟΥ → ΟΥ

145 頁 10 行目 (20 章 14 節) ΚΕ → ΙΚ

異なる読みが複合されて生じた間違いが訂正されている箇所が 4 つある。

9 頁 13 行目 (2 章 13 節) で、なぜか接続詞が ΚΑΙ と ΔΕ の二つあるので、ΔΕ を削除して訂正している。接続詞 kai の方が圧倒的に多くの写本から支持されている読みではあるが、シナイ写本では ΔΕ の読みが採用されている。

51 頁 5 行から 6 行にかけて (7 章 46 節) は、異なる読みが複合されて間違いが生じたので、大幅な削除の訂正がなされていると思われる。前半にも訂正の手が入っているので、事態は複雑化している。訂正される前の本文がシナイ写本の本来の読みとほぼ一致していることから、この箇所の本文を巡っては、異読が複雑に合

成されて、訂正がなされた経緯を想定しなければならない。

55 頁 18 行から 56 頁 1 行目にかけては、写字生が動詞の前 ΟΥΔΕΝΙ と動詞の後の ΟΥΔΕΝΙ を組み合わせたとと思われる。異なる写本の異なる読みを組み合わせたために生じた間違いであるか、または写字生の目が移ったために生じた間違いかは判断しかねる。動詞の後の ΟΥΔΕΝΙ の方が削除されて訂正されている。

117 頁 13 行目 (16 章 19 節) では類義の動詞 ΗΜΕΛΛΟΝ と ΗΘΕΛΟΝ の両方が見出される。パピルス 66 番の底本では、一方が本文に、他方は訂正として両方が見出されたものと思われる。ところが、写字生は当初、両者の動詞を含めた読みが本来の本文であると誤解して取り込むことにしたが、後で ΗΜΕΛΛΟΝ のみが本文の読みであると判断して、ΗΘΕΛΟΝ の方を削除している。

9 頁 13 行目 (2 章 13 節) と 117 頁 13 行目 (16 章 19 節) では、大多数の読みとシナイ写本の読みとの複合が見出されている。前者では、シナイ写本の読みを退けて大多数の読みに従っている一方で、後者では大多数の読みを退けてシナイ写本の読みを採用している <sup>47</sup>。そこで、パピルス 66 番の本文に訂正が施された際に、別

46 訂正前の読みは判読できない。

47 あくまでも現代の視点から言い表しているだけで、パピルス 66 番の本文に訂正が加えられる際に、そのような判断で訂正がなされたとは断言できないことは言うまでもない。そもそも二

の底本を参考したかどうか次項で検討したい。

## 複数の底本を利用した可能性

指摘した通りに、パピルス 66 番の本文に多数の訂正が施されていることは、本コデックスの特徴である。写字生がパピルス 66 番を作成する際に、ひとつの底本が手許にあって、その底本の複製を作成しようとしたのであろうか。それとも、手許にあった複数の底本を参考しながら、より良い本文を書写しようと努めたのであろうか。パピルス 66 番の訂正に焦点を合わせて、以上のような問いに答える試みを以下に企てることにする。

パピルス 66 番の本来の読み、あるいは訂正後の読み、場合によっては両者共に主要な本文の伝承に支持されている訂正箇所がある。先ず、西方型本文の代表であるベザ写本の本文との関係を見る<sup>48</sup>。それからシナイ写本やアレクサンドリア写本やヴァティカン写本に代表されるアレクサンドリア型の本文<sup>49</sup>との関係を見ていくことにする。

### 1 ベザ写本の本文から離れる訂正

- 17 頁 10 行目 (4 章 1 節)  $\overset{\dots}{\text{ΟΙC}} (= \text{ΙΗCΟΥC}) \rightarrow \overset{\dots\dots}{\text{ΟΚC}} (= \text{ΚΥΡΙΟC})$   
 19 頁 14 行目から 15 行目 (4 章 15 節)  $\Delta\text{Ι}\Psi\text{HC}\omega \rightarrow \Delta\text{Ι}\Psi\omega$   
 33 頁 18 行目から 19 行目 (6 章 5 節)  $\text{ΟΧΛΟC ΠΟΛΥC} \rightarrow \text{ΠΟΛΥC ΟΧΛΟC}$   
 34 頁 16 行目 (6 章 10 節)  $\text{ΟΙ}$  省略  $\rightarrow$   $\text{ΟΙ}$  挿入  
 45 頁 15 行目 (7 章 12 節)  $\text{ΕΝ} \rightarrow \text{ΠΟΛΥC ΕΝ}$   
 46 頁 2 行目 (7 章 14 節)  $\text{ΜΕCΑΖΟΥCΗC} \rightarrow \text{ΜΕCΟΥCΗC}$   
 48 頁 6 行目 (7 章 28 節)  $\text{ΕΚΡΑΖΕΝ} \rightarrow \text{ΕΚΡΑΞΕΝ}$   
 49 頁 20 行目 (7 章 37 節)  $\text{ΕΚΡΑΖΕΝ} \rightarrow \text{ΕΚΡΑΞΕΝ}$   
 49 頁 21 行目 (7 章 37 節)  $\text{ΠΡΟC ΜΕ}$  省略  $\rightarrow$   $\text{ΠΡΟC ΜΕ}$  挿入

---

通りの読みが複合されたということ自体が恣意的な解釈であるかもしれない。

- 48 フィーもロイズも「西方写本」と一括りにしているが、「西方写本」という括りが適切であるか議論があるので、本稿ではベザ写本との関係で論じることにした。
- 49 「アレクサンドリア型」とは言っても、必ずしもアレクサンドリア写本の読みが「アレクサンドリア型」本文とは限らないので、誤解を招きやすい名称である。とはいえ、ウエストコットとホルトなどの「中立型」という名称にも難があることは言うまでもない。



50 頁8行目 (7章40節)  $\lambda\gamma\tau\omicron\upsilon\gamma \tau\omega\eta\lambda\omicron\gamma\omega\eta\eta \rightarrow \tau\omega\eta\lambda\omicron\gamma\omega\eta\eta$

51 頁4行目から5行目 (7章46節)

.....  
 $\omicron\gamma\tau\omega\varsigma\alpha\lambda\eta\omicron\varsigma\epsilon\lambda\lambda\eta\eta\varsigma\epsilon\eta \rightarrow \epsilon\lambda\lambda\eta\eta\varsigma\epsilon\eta \omicron\gamma\tau\omega\varsigma \alpha\lambda\eta\omicron\varsigma$

59 頁7行目 (8章53節)  $\omicron\tau\iota \rightarrow \omicron\varsigma\tau\iota\varsigma$

63 頁5行目 (9章18節)  $\epsilon\omega\varsigma \omicron\gamma \rightarrow \epsilon\omega\varsigma \omicron\tau\omicron\gamma$

65 頁6行目 (9章30節)  $\lambda\gamma\tau\omicron\iota\varsigma$  省略  $\rightarrow \lambda\gamma\tau\omicron\iota\varsigma$  挿入

68 頁13行目 (10章10節)  $\epsilon\chi\omega\varsigma\iota\eta\eta \rightarrow \epsilon\chi\omega\varsigma\iota\eta\eta \kappa\iota \pi\epsilon\rho\iota\varsigma\varsigma\omicron\epsilon\chi\omega\varsigma\iota\eta\eta$  .....

70 頁16行目 (10章22節)  $\Delta\epsilon \rightarrow \tau\omicron\tau\epsilon$  .....

73 頁2行目 (10章36節)  $\gamma\varsigma (= \gamma\iota\omicron\varsigma) \theta\gamma (= \theta\epsilon\omicron\omicron\gamma) \rightarrow \gamma\varsigma \tau\omicron\gamma \theta\gamma$  .....

84 頁16行目から85 頁1 行目 (12章3節)

$\mu\gamma\omicron\upsilon \pi\iota\varsigma\tau\iota\kappa\eta\varsigma \rightarrow \mu\gamma\omicron\upsilon \eta\alpha\rho\delta\omicron\upsilon \pi\iota\varsigma\tau\iota\kappa\eta\varsigma$

88 頁11行目 (12章19節)  $\lambda\gamma\tau\omicron\gamma\varsigma \rightarrow \epsilon\lambda\gamma\tau\omicron\gamma\varsigma$

91 頁5行目 (12章31節)  $\kappa\omicron\varsigma\mu\omicron\gamma \rightarrow \kappa\omicron\varsigma\mu\omicron\gamma \tau\omicron\gamma\tau\omicron\gamma$

93 頁8行目 (12章40節)  $\mu\eta \eta\omicron\eta\varsigma\omega\varsigma\iota\eta\eta \rightarrow \eta\omicron\eta\varsigma\omega\varsigma\iota\eta\eta$

94 頁4行目 (12章44節)  $\epsilon\kappa\rho\alpha\lambda\lambda\epsilon\eta\eta \rightarrow \epsilon\kappa\rho\alpha\lambda\lambda\epsilon\eta\eta$

113 頁14行目 (15章17節)  $\iota\eta\alpha$  省略  $\rightarrow \iota\eta\alpha$  挿入

123 頁7行目 (17章14節)

$\kappa\alpha\theta\omega\varsigma \epsilon\gamma\omega \epsilon\kappa \tau\omicron\gamma \kappa\omicron\varsigma\mu\omicron\gamma \omicron\gamma\kappa \epsilon\iota\mu$  省略  $\rightarrow \kappa\alpha\theta\omega\varsigma \epsilon\gamma\omega \epsilon\kappa \tau\omicron\gamma \kappa\omicron\varsigma\mu\omicron\gamma \omicron\gamma\kappa \epsilon\iota\mu\iota$  挿入

## 2 ベザ写本の本文に近づく訂正

25 頁3行目 (4章51節)  $\omicron \pi\alpha\iota\varsigma \lambda\gamma\tau\omicron\gamma \rightarrow \omicron \gamma\iota\omicron\varsigma \varsigma\omicron\gamma$

79 頁9行目から10行目 (11章33節)

.....  
 $\epsilon\beta\rho\epsilon\iota\mu\eta\varsigma\alpha\tau\omicron \tau\omega \pi\eta\eta \kappa\alpha\iota \epsilon\tau\alpha\rho\alpha\lambda\lambda\epsilon\eta\eta \epsilon\lambda\gamma\tau\omicron\eta\eta$

$\rightarrow \epsilon\tau\alpha\rho\alpha\lambda\lambda\epsilon\eta\eta \tau\omega \pi\eta\eta \omega\varsigma \epsilon\mu\beta\rho\iota\mu\omega\mu\epsilon\eta\omicron\varsigma$

80 頁12行目 (11章41節)  $\omicron\phi\theta\alpha\lambda\lambda\omicron\mu\omicron\gamma\varsigma \rightarrow \omicron\phi\theta\alpha\lambda\lambda\omicron\mu\omicron\gamma\varsigma \lambda\gamma\tau\omicron\gamma$

94 頁13行目 (12章47節)  $\mu\eta \rightarrow \mu\eta$  削除

上記の1と2とを比較するとわかるとおりに、パピルス66番の本文では、ベザ写本の本文の方向に行くよりも、遠ざけられる方向に訂正がなされたことは一般的な傾向として認められる。

### 3 アレクサンドリア型（「中立型」）の本文から離れる訂正

- 5 頁 18 行目（1 章 42 節） ΗΓΑΓΕΝ → ΟΥΤΟΣ ΗΓΑΓΕΝ
- 9 頁 11 行目（2 章 12 節 a） ΟΙ ΛΔΕΛΦΟΙ → ΟΙ ΛΔΕΛΦΟΙ ΑΥΤΟΥ
- 9 頁 12 行目（2 章 12 節 b） ΕΜΕΙΝΑΝ → ΕΜΕΙΝΑΙΝ (=ΕΜΕΙΝΕΝ)
- 21 頁 1 行目から 2 行目（4 章 25 節） ΟΙΔΑ → ΟΙΔΑΜΕΝ
- 39 頁 15 行目（6 章 40 節 c） ΕΧΗ → ΕΧΕΙ
- 52 頁 1 行目から 2 行目（7 章 52 節 a）
- ΕΚ ΤΗΣ ΓΑΛΙΛΑΙΑΣ Ο ΠΡΟΦΗΤΗΣ  
→ Ο ΠΡΟΦΗΤΗΣ ΕΚ ΤΗΣ ΓΑΛΙΛΑΙΑΣ
- 53 頁 16 行目（8 章 21 節） ΑΥΤΟΙΣ → ΑΥΤΟΙΣ Ο IC (=ΙΗΣΟΥΣ)
- 54 頁 13 行目（8 章 25 節 a） IC (=ΙΗΣΟΥΣ) → ΟΙC (=ΙΗΣΟΥΣ)
- 55 頁 1 行目（8 章 28 節 a） ΑΥΤΟΙC 省略 → ΑΥΤΟΙC 挿入
- 66 頁 4 行目（9 章 36 節） ΕΦΗ → ΕΦΗ 削除
- 83 頁 11 行目（11 章 54 節 c） ΕΜΙΝΕΝ (=ΕΜΕΙΝΕΝ) → ΔΙΕΤΡΙΒΕΝ
- 87 頁 16 行目（12 章 16 節 a） IC (=ΙΗΣΟΥΣ) → ΟΙC (=ΙΗΣΟΥΣ)
- 90 頁 6 行目（12 章 26 節 c） ΕΑΝ ΤΙC → ΕΑΝ ΔΕ ΤΙC
- 94 頁 10 行目（12 章 46 節） Ο ΠΙCΤΕΥΩΝ → ΠΑC Ο ΠΙCΤΕΥΩΝ
- 99 頁 10 行目（13 章 18 節） ΕΜΕ → ΕΠ ΕΜΕ
- 90 頁 15 行目（13 章 20 節 a） ΑΝ → ΕΑΝ
- 100 頁 2 行目（13 章 21 節 a） IC (=ΙΗΣΟΥΣ) → ΟΙC (=ΙΗΣΟΥΣ)
- 100 頁 10 行目（13 章 23 節 b） IC (=ΙΗΣΟΥΣ) → ΟΙC (=ΙΗΣΟΥΣ)
- 100 頁 12 行目（13 章 25 節）
- ΑΝΑΠΕC Ω (=ΑΝΑΠΕCΩΝ) → ΕΠΙΠΕC Ω (=ΕΠΙΠΕCΩΝ)
- 105 頁 12 行目から 13 行目（14 章 11 節） ΕΡΓΑ ΑΥΙΤΟΥ → ΕΡΓΑ ΑΥΙΤΑ
- 106 頁 14 行目（14 章 17 節 b） ΓΕΙΝΩCΚΕΙ → ΓΕΙΝΩCΚΕΙ ΑΥΤΟ
- 107 頁 16 行目（14 章 22 節） ΤΙ → Κ, (=ΚΑΙ) ΤΙ
- 134 頁 9 行目（19 章 4 節）
- [ΚΑΙΕΞ]ΗΛΘΕΝ/[ΕΞ]ΗΛΘΕΝ → [ΕΞ]ΗΛΘΕΝ ΟΥΝ
- 146 頁 7 行目（20 章 18 節） ΑΓ[ΓΕ]ΛΛΟΥCΑ → ΑΠΑΓ[ΓΕ]ΛΛΟΥCΑ

### 4 アレクサンドリア型の本文に近づく訂正

- 6 頁 14 行目（1 章 46 節） ΦΙΛΙΠΠΟC → Ο ΦΙΛΙΠΠΟC

10 頁3行目 (2章15節 b) ΤΟ ΚΕΡΜΑ → ΤΑ ΚΕΡΜΑΤΑ  
 25 頁7行目 (4章52節) ΕΙΠΟΝ → ΕΙΠΟΝ ΟΥΝ  
 41 頁14行目から16行目 (6章55節) ΛΗΘΩΣ 2回 → ΛΗΘΗΣ 2回  
 50 頁6行目 (7章39節) ΠΝΑ (=ΠΝΕΥΜΑ) ΑΓΙΟΝ → ΠΝΑ (=ΠΝΕΥΜΑ)  
 50 頁11行目 (7章41節 2番目の訂正)

ΑΛΛΟΙ ΕΛΕΓΟΝ → ΟΙ ΔΕ ΕΛΕΓΟΝ

51 頁5行目から6行目 (7章46節 b)  
 ΩΣ ΟΥΤΟΣ ΑΛΛΕΙ Ο ΑΝΘΡΩΠΟΣ → 削除  
 70 頁16行目 (10章22節) ΔΕ → ΤΟΤΕ  
 71 頁11行目から12行目 (10章26節)

ΚΑΘΩΣ ΕΙΠΟΝ ΥΜΕΙΝ ΟΤΙ → 削除

71 頁15行目から16行目 (10章28節)  
 ΖΩ Η ΛΙΩΝΙΟΝ ΔΙΔΩΜΙ ΑΥΤΟΙΣ → ΔΙΔΩΜΙ ΑΥΤΟΙΣ ΖΩ Η ΛΙΩΝΙΟΝ  
 78 頁8行目 (11章29節) ΕΚΕΙΝΗ → ΕΚΕΙΝΗ ΔΕ  
 79 頁2行目 (11章32節) ΜΑΡΙΑ → ΜΑΡΙΑΜ  
 104 頁5行目 (14章4節) ΚΑΙ ΤΗΝ ΟΔΟΝ ΟΙΔΑΤΑΙ → ΤΗΝ ΟΔΟΝ

## 5 初期の写本の証言が分かれていて、訂正後の読みが「西方」「中立」というような範疇に入らない場合がある

2 頁18行目 (1章19節 b) ΛΕΓΕΙΤΑΣ → ΛΕΓΕΙΤΑΣ [ΠΡΟΣ ΑΥΤΟΝ]  
 3 頁1行目 (1章22節) ΤΙΣ ΕΙ → CΥ ΤΙΣ ΕΙ  
 3 頁15行目 (1章27節) ΟΥΚ ΕΙΜΙ → ΟΥΚ ΕΙΜΙ ΕΓΩ  
 4 頁19行目から20行目 (1章36節)  
 ΘΥ Ο ΛΙ[Ρ]ΩΝ ΤΗΝ ΑΜΑΡΤΙΑΝ ΤΟΥ ΚΟΣΜΟΥ → ΘΥ  
 17 頁3行目 (3章34節) ΜΕΡΟΥΣ → ΜΕΤΡΟΥ  
 24 頁14行目 (4章48節 a) ΕΙΠΕΝ → ΕΙΠΕΝ ΟΥΝ  
 30 頁10行目 (5章29節) ΚΑΙ ΟΙ → ΟΙ  
 33 頁12行目 (6章2節) ΕΩΡΩΝ → ΕΘΕΩΡΟΥΝ  
 34 頁16行目 (6章10節) ΟΙ 省略 → ΟΙ 挿入  
 40 頁6行目 (6章44節) ΕΝ ΤΗ → ΤΗ  
 44 頁14行目 (7章4節) ΑΥΤΟ → ΑΥΤΟΣ  
 59 頁9行目 (8章54節) ΔΟΞΑΖΩ/ΔΟΞΑΞΩ → ΔΟΞΑΣΩ

61 頁 14 行目 (9 章 10 節) ΠΩC → ΠΩC ΟΥ  
62 頁 8 行目 (9 章 15 節 a) ΟΙ → Κ, ΟΙ  
62 頁 10 行目 (9 章 15 節 b) ΜΟΙ → ΜΟΥ  
63 頁 1 行目 (9 章 17 節) ΠΕΡΙ CΕΛΥΤΟΥ → ΠΕΡΙ ΛΥΤΟΥ  
74 頁 4 行目 (11 章 1 節) ΛΥΤΟΥ → ΛΥΤΗC  
79 頁 13 行目 (11 章 35 節) ΙC (=ΙΗCΟΥC) → ΟΙC (=ΙΗCΟΥC)  
81 頁 11 行目 (11 章 45 節 b)  
82 頁 14 行目 (11 章 51 節) ΑΛΛ → ΑΛΛΑ  
86 頁 9 行目 (12 章 9 節 b) ΛΑΟΝ → ΛΑΖΑΡΟΝ  
87 頁 16 行目 (12 章 16 節 b) ΤΟΤΕ 省略 → ΤΟΤΕ 挿入  
88 頁 7 行目 (12 章 18 節) ΚΑΙ 省略 → Κ,(=ΚΑΙ) 挿入  
94 頁 3 行目 (12 章 43 節) ΗΠΕΡ → ΥΠΕΡ  
99 頁 3 行目 (13 章 16 節) ΜΕΙΖΩΝ 省略 → ΜΙΖΟΝ 挿入  
103 頁 14 行目 (14 章 2 節 b) ΟΤΙ 省略 → ΟΤΙ 挿入  
106 頁 14 行目と 15 行目 (14 章 17 節 a) ΛΥΤΟΝ 2 回 → ΛΥΤΟ 2 回  
106 頁 16 行目 (14 章 17 節 c) ΕCΤΙ (=ΕCΤΙΝ) → ΕCΤΑΙ  
132 頁 1 行目 (18 章 34 節) CΥ 省略 → CΥ 挿入  
134 頁 17 行目 (19 章 6 節)  
[CΡΟ]N(=CΤΑΥΡΩCΟΝ)  
→ [CΡΟ]N CΡΟΝ(=CΤΑΥΡΩCΟΝ CΤΑΥΡΩCΟΝ)  
136 頁 3 行目 (19 章 12 節) ΑΝ → ΕΑΝ  
136 頁 14 行目 (19 章 15 節 a) [ΟΙ ΔΕ ΕΛ]ΕΓΟΝ → [ΟΙ ΔΕ ΕΚ]ΡΑΥΓΑC  
141 頁? 行目 (19 章 38 節) ΑΠΟ → Ο ΑΠΟ  
144 頁 16 行目 (20 章 11 節) ΜΑΡΙΑ → ΜΑΡΙΑΜ

6 訂正前の読みが余り支持されていない場合も少なくない<sup>50</sup>

50 ロイズは、以下の箇所を挙げている。1章49節、2章2節、3章19節、4章9節c、4章12節、4章37節、4章42節、5章22節、5章37節、6章1節、6章9節b、7章9節b、7章44節a、7章44節b、8章48節、9章39節a、10章7節、10章38節a、10章41節、11章6節、12章2節a、12章15節、12章26節b、13章15節、14章10節a、14章23節a、15章7節、17章19節、18章1節、18章40節a、18章40節b、19章11節、19章15節b

多くの場合には書き損じを訂正したものと思われる。あるいは、元来の底本から写字する際に、書き写しミスを行ってしまったものと思われる。断言できないが、第二の底本を参考にして訂正したというよりも、改めて底本と照合して訂正した可能性の方が高いように思われる。複数の底本や底本の変更を想定しないで、十分に説明がつく訂正である。

## 結論

以上、訂正箇所を中心にしてパピルス 66 番を見てきた。沢山の訂正を経たにも拘わらず、まだ多くの書き損じや綴り字の間違いが残っていることも事実ではあるが、多くの訂正が本コデックスの本文に加えられていることは、写字生が細心の注意を払って、何度か見直して、少しでも正確な本文を残すように努力したことを伺うことができる。また、複数の底本を活用して、写本を作成した可能性も探ることができたと思う。

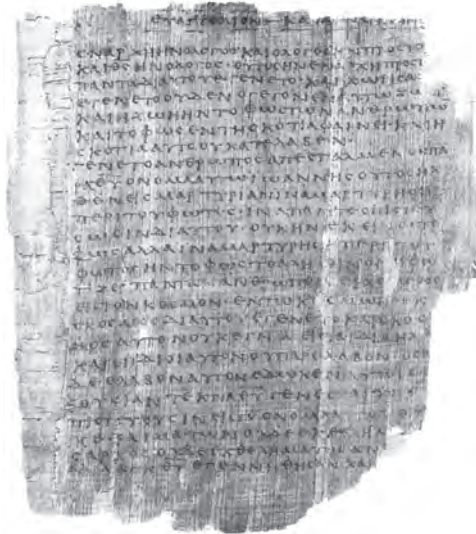


図1 パピルス 66 番 1 頁